

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアで暮らすロヒンギャ難民

塩崎悠輝 (静岡県立大学国際関係学部准教授)

ロヒンギャ難民が海上で漂っている様子が世界中に報道されたのは、2015 年のことであった。マレー半島から見て北西に位置するアングマン海でボート一杯に乗った人々が、タイ、マレーシア、インドネシアといった諸国に上陸することもできずに漂っている姿が映し出された。

ロヒンギャと呼ばれる人々は、ミャンマーの南西部ラカイン州に住んでいた。同国政府が 1982 年に施行した市民権法により国籍をはく奪されてしまい、以後、迫害を受ける度に、国外に逃れる人々が相次いだ。現在では、200 万人近くがバングラデシュ、サウジアラビア、パキスタン、そしてマレーシアに滞在しており、国際的な問題になっている。



バングラデシュの難民キャンプでビルマ語を学ぶロヒンギャの子どもたち (筆者撮影)

マレーシアは、数十万人の難民が居住する国である。マレーシアは難民条約には加盟しておらず、ここでいう「難民」とは、マレーシア政府が難民条約の規定に従って認定した難民ではない。本稿では、難民条約が定義する「人種、宗教、国籍もしくは特定の社会的集団の構成員であること、または政治的意見を理

由に迫害を受ける可能性がある人々」を難民と呼ぶ。マレーシアの国連難民高等弁務官事務所が登録した「難民」だけでも 2017 年で 15 万人に達していた。その中でも際立って多いのがミャンマー出身者であり、チン人、モン人、シャン人といった少数民族、そしてロヒンギャの人々である。17 年に 100 万人近いロヒンギャ難民がミャンマーから逃れる事態があり、マレーシアに居住するロヒンギャ難民は今や 20 万人を越えていると考えられる。

マレーシアには総雇用者数の 4 割程度、約 550 万人

の外国人労働者がおり、そのうち就労許可を得ているのは約 220 万人であると考えられる。マレーシアに難民が流入し続けているのは、外国人労働者に依存している経済があり、就労許可が無くても働いて収入を得ることが実質的に可能な環境があることが第一の理由であろう。ロヒンギャ難民もまた、特に若い男性が仕事と収入を求めて、マレーシアに流入してきている。彼らが働いているのが最もよく見られるのは、スランゴールやペナンの農産物市場である。ロヒンギャ難民コミュニティも、その近辺に集中している。

ロヒンギャの人々は、ミャンマーでは国籍をはく奪されたため、公的な教育や医療を受けられない。迫害を受けても法の保護は無い。かといって、マレーシアにおいても、法的には不法滞在者である。就労許可も無い。子どももマレーシアの公的な教育は受けられず、児童労働に従事する子どもが多い。しかし、それでもなお、ミャンマー本国や隣国のバングラデシュと比べれば、仕事とよりましな生活があることから、ロヒンギャ難民はマレーシアに流入し続けている。

20 万人を越える人々が、法的な身分も教育も無いまま、世代を超えてマレーシアに住み続けると、多くの問題に直面せざるをえない。教育や医療、貧困といった課題は、マレーシアの非政府組織 (NGO)、特にイスラム系の諸団体が支援に取り組んでいるが、いずれもあまりにも不足している。マレーシア政府、そしてムスリム (イスラム教徒) であるマレー人の大多数も、身近に存在しているロヒンギャ難民については、深くは触れず、放置している、というのが現状である。このような公的には存在を認知されることもなく、放置された何十万もの人々が暮らしているのも、マレーシア社会の一面である。

< 筆者紹介 >

外務省在マレーシア日本国大使館専門調査員、同志社大学特別任用助教を経て現職。東南アジアのイスラムや中東との歴史的関係について研究している。著書に『国家と対峙するイスラーム マレーシアにおけるイスラーム法学の展開』(作品社)、『クルアーン的世界観』(共著、作品社) などがある。